

## 狂乱の中欧：夏の陣

盛田 常夫

モルダウ-エルベ河の氾濫、ドナウの水位上昇で、8月の夏休みも吹き飛んだ中欧だが、幸いにドナウはブダペストを襲うまでには至らなかった。プラハ浸水ニュースの最中、UEFAチャンピオンズ・リーグの予選3回戦の第一戦がブダペストで開催された。今年のハンガリー・リーグの覇者ザラエゲルセグ（ZTE）が、シードでこれが初戦となるマンチェスター・ユナイテッド（MU）と対戦したのだ。言うまでもなく、MUは彼の「ベッカム様」が率いる年俸総額で世界最高のスター軍団だ。いくらハンガリー・チャンピオンとはいえ、発音が難しく聞いたこともない名前の田舎クラブと闘うのだ。最初から結果は分かっているというのが大方の予想だった。

### 番狂わせ

ところが何と、90分で勝負がつかず、ロスタイムに入って、左のスペースに球が入り、すかさず折り返したところにフォワードが飛び込んで、ZTEが勝ってしまった。試合終了間際でMUのディフェンス陣の詰めが甘かった。CNNとユーロスポーツがこの番狂わせのシーンを何度となく放映したのは言うまでもない。舌を噛みそうな発音で、ザラエゲルセグの名前が繰り返された。このジャーナルが印刷されている頃には、MUの本拠地でのリターンマッチが終わっている。真夏の夜の夢と終わるか、それともZTEの快進撃の始まりとなるのか、注目したい。強いものが常に勝つとは言えないのがサッカー。それが面白い。

同じくシードされたフェイエノールトは値千金の小野の一発で初戦を飾った。CNNのスポーツニュースでも、「W杯の日本のヒーロー小野」と紹介された。稲本と混同しているのだろう。小野と稲本が区別されて報道されるまで、まだ一人前とは言えないか。

この時期、日本は高校野球やプロ野球でスポーツ紙面が塗りつぶされ、外国での日本人の活躍が大きく報道されることはない。しかし、陸上のグランプリ・シリーズにはハンマー投げの室伏や400米ハードルの為末が参戦しているし、何よりも女子テニスの杉山が頑張っている。パワー全盛時代の並み居る175センチ70キロを超える大女たちに比べ、163センチ55キロの杉山はか細い少女。その少女が7月末から8月の四大トーナメントに次ぐアキュラクラシックス、JPモルガンに参戦し、シングルスで連続ベストファオー、スロバキアのハンチュコーヴァと組んだダブルスでも連続準優勝と気を吐いた。JPモルガンでは「姉御」カプリアティをストレートで破った。さすがに「清原」並みの体格のダーヴェンポートには歯が立たなかったが、この体格でトーナメントに活躍しているのは、南アの技巧派クツァーと「少年テニス」をするベルギーのヘニンだけ。何よりもサーブが良くなったことと、フォアで打ち負けていないところに進歩が見られる。

男子もパワーテニスになって久しいが、松岡修造以降、世界で通用するアジアのテニス

選手が出ていない。ところが、この 8 月のワシントンで、スリチャファンというタイの選手が踊り出た。松岡とチャンを合体した顔つき。アガシを破ったブレイドと決勝を闘った。勝っている試合を落としたが、この選手は強くなる。シャツを取り替えるシーンで垣間見たのだが、185 センチ、75 キロの体格は、ボデービルで鍛えた筋肉マンそのものだ。これほどの筋肉をつけているテニス選手はいない。片手バックハンドで、高い打点からフラットでクロスに打つ筋力がある。両手打ちの場合は珍しくもないが、片手でこれができる選手を見たことがない。サンプラスでもバックの高い球はスライスで返す。フラットを振り下ろす力は並のものではない。世界のトップで通用する体力とはこういうものだ。

### 「腐敗」と「過去」の接点

現実の世界に戻ると、ハンガリーでは夏休みを返上しながら、「秘密警察・内務省諜報部員」をめぐる調査委員会が開催されている。一つはメジェッシ首相の過去を調査する委員会、もう一つは 1990 年以降の歴代内閣の閣僚・次官の「諜報歴」を調査する委員会。前者の委員会はメジェッシの聴聞を終え、山を越した。資料はたくさん出てきたが、辞任を促す新しい事実は出ていない。

それとは逆に、「歴代調査」委員会には過去の閣僚のデータが集まり、諜報部員の過去をもつ者の数が FIDESZ 内閣時代に 1 番多いという情報が新聞に流れた。これに FIDESZ は慌てた。これではやぶ蛇。この漏洩は社会党の陰謀で、FIDESZ を陥れるものだと委員から退席してしまった。新聞情報で名前が漏れたのは、ヤーライ現国立銀行総裁( FIDESZ 内閣蔵相) とポロシュ現 MDF 幹部( FIDESZ 内閣 PHARE 担当大臣) の 2 名。このうちヤーライは、メジェッシと同じく、国際機関におけるハンガリーの評価をめぐる情報収集に従事したことを認めた。他方、ポロシュは新聞やテレビで漏れた情報は、捏造情報だと認めておらず、MDF 内部の紛争を呼び起こしそうだ。

Defend KFT をめぐる動きも奇妙だ。200 万 Ft で前社長フォドルから 16%の所有権を獲得したチンタラン(元社会党副党首)から、国がその所有権を買い取るために、3 億 Ft 近くの支払が必要だと報道されている。これに気をよくしたチンタラン曰く、「美德以外、すべてものに価格がある」と。つまり、買取にはそれ相応の支払いが必要だというのだ。資産価値 20 億 Ft から逆算されて 3 億 Ft が出てくる。「盗人に追い銭」とはこういうこと。我々が収めた税金をこのように使って欲しくない。チンタランの税務調査をやれば、逆に追徴課税が必要なことは明らかだ。ちなみに、フォドルは旧体制時代の秘密諜報部員で、その経験を利用して、ポシュタバンクから倒産寸前の Defend KFT を数百万 Ft で買い取り、FIDESZ 政権からセキュリティ関連の国家発注を一手に引き受け、資産価値を高めた。そうして所有権の 84%を、FIDESZ が徹底利用した開発銀行に買い取らせ、政権が変わったところで、持分の 16%をチンタランにただ同然にプレゼントしたのだ。叩けばいくらでも埃が出てくる奇怪な取引を繰り返している連中だ。「犯罪にも支払うべき価格がある」と主張するジャーナリズムが存在しないのは、ハンガリーの弱点。経済犯罪に非常に寛容なのだ。

同じ頃、チェコでは社民党政権に巣くったカレル・シュルヴァ（旧外務大臣顧問）のスキャンダルを追いかけたジャーナリスト、サビナ・スロンコヴァ女史の暗殺未遂で、4名が逮捕されるという事件が発覚した。チェコ政界を揺るがす事件になっている。囑託殺人は1990年代を通してロシアやウクライナで頻発しており、著名なジャーナリストが暗殺される事件も発生している。ハンガリーでも1998年のフェニュー・ヤーノシュ囑託殺人事件がある。しかし、これまで中欧ではスキャンダルを追求したジャーナリストが標的になった事件は報告されていない。カレル・シュルヴァが秘密警察の経歴を持つことから、軍部か旧秘密警察に巣くう一派の陰謀かとチェコ政界に衝撃を与えている。

チェコもハンガリーも、依然として、旧体制の亡霊に動かされているといえようか。

2002年8月